

父・大塚伴鹿を、祖父・大野伊右衛門を語る

語り手 大塚伴鹿氏の子息・大塚善人氏

大野伊右衛門氏の孫・大野光政氏

平成22年6月27日(日) 越谷商工会館



会場入り口に貼られた開催ポスター

——みなさんこんにちは。お暑いところ大勢の方にお集まりいただきましてありがとうございます。越谷市郷土研究会の歴史講演会ということで今回は講演ではなく、お二人のお話をお聞きするということで催させていただきました。

越谷市が昨年で市制50年ということで、いろいろと行事もございました。と、いうことで思い付きましたのは大塚伴鹿(ぼんろく)さんという初代の市長さんのご子息さんが長い海外のご勤務からお戻りになりました、越谷におられるということをちよつと頭の中にひらめきまして。それから我々の郷土研究会の初代の会長でございました大野伊右衛門さんのお孫さんでございます。大野光政さんが越谷市内でご活躍でございます。何とかこのお二人のお話をまとめてお聞きすることができないかというところを考えたのが発端でございます。たまたま今日、念願がかないまして、お二人の話をお聞きできる講演会をさせていただくことになりました。また、みなさんにご協力いただきまして、このような大勢の方に来ていただきまして、座席も無いような状況でございますけれどもお許しを願います。

越谷市の市としても幼年時代と申しますか、越谷市の文化としても揺籃期でしたけれど、現在は大きな大木になっております。揺籃期の時期にいろいろご活躍いただきました大塚伴鹿さんと大野伊右衛門さんのお話を、時間の制限もあり十分とは言えませんが、お話をうかがい、我々も50年前の越谷の文化がどのような状態だったのか、またそれま



宮川会長の司会進行で進められた

でに越谷の固有の文化もあったとも思いますけれども、お二人にお話をうかがい、これからの越谷市がどういうふうに進むべきか、とのお話をお聞きしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

はじめは文人市長として初代の市長として活躍いただきました大塚伴鹿さんのご子息に当たられます大塚善人さん。現在は南越谷コミュニティセンターの所長をなさっております。これまでの経歴としては、国際交流協会にお勤めでござい

て、パリとかローマとかに非常に長いご経験があります。日本語よりもフランス語の方がお達者ということでございます。

限られた時間でありますのでお二人それぞれ45分ずつという持ち時間ではございますが、その間に質問、ご懇談の時間を入れさせていただきたいと思えます。そういう趣旨でございますので、よろしくお願いいたします。それでは大塚さんお願いいたします。

はじめまして、わたくし大塚善人でございます。越谷に大塚家が来まして五代目でございます。大野家に比べると全然若い家でございます。最初にお話させていただくのは恥ずかしい限りですが、ご了承いただければと思います。

大塚伴鹿という人は、私が言うのもなんですが大変偉大な人だったと思います。これからいかに偉大であったかというお話をするわけですが、まずご注ぎ願いたいのは、私は全くそれとは逆の人物であるということをお断りしておきたいと思えます。本当に偉大な人ですけど私と混同されないようにお聞きいただければありがたいと思えます。大塚家といえますか大塚伴鹿が凶らずも町長になってしまったわけですけど、それにはそれなりの必然性というものがありません。

大塚家が越谷に参りましたのは幕末でございます。松本家という確か二丁目か三丁目で大変な大地主なんですけれど、その松本家は、杉戸の堤根とい

うところから養子に入りまして、その後たぶん次男だと思っておりますけれど、松本家から分かれて大塚を再び名乗りまして、それが初代の大塚善兵衛です。

二代目の大塚善兵衛はこれが越谷の町長を命じられ、その長男の大塚善太郎がまた町長をやります。大塚伴鹿が三代目になるわけです。ただし大塚伴鹿という人は若い時から学者志望でございまして、早稲田の高等学院を経てその後、大東文化大学に進みまして中国哲学、漢学の道に進みました。今でもその著書は古本屋で見つけることができます。今日一冊持つて参りましたが、儒家と相対するような、その墨子の研究といい、装丁からして古い本ですけど、その墨子の研究では当時、戦前でですけど父は第一人者であったと思えます。今でもこの本が古書店で売られているのを見ますと、まだ読んでいる人がいるのだなーと私は思っております。

その父がそのまま学者になる筈だったんですけど、戦争が終りまして当時中央大学の講師をしていましたけれど、まだ二十代から三十ぐらいだったと思えますが、漢学といえますか中国哲学がやはりじゃなくなったわけですね、大学におきまして。それで中央大学を出ざるを得なくなり失職したわけです。越谷でぶらぶらしていたらいいのですね。親父が町長をやっていたということもありまして、その頃に周りの人がぶらぶらしてもいいから町会議員でもやってみないかという人がいて「そうか」ということで町会議員を引き受けたそうです。票はその人たちが取りまとめて何の努力もしない

で町会議員になったようです。町会議員を一年ほどやって、町会の様子を見て当時の町長の様子を見てたんでしょね。それなら俺がやった方がいいかなーと、どうも思ったらしいのですね。そこが運のつきでしたね。それで町長に出ました。33歳

で町長の選挙に出してしまいました。凶らずも当選したんですね。それで彼の人生が全く変わってしまいました。私はそれがよかったのかどうか、今でもわかりません。学者になつていた方がよかったのか、しかし越谷のためには越谷の町長になってくれたのは本当によかったと思えます。私の父がどういいう人間であったかということは、私は今から思い起こしてといいますか、この年になってだんだんわかるようになりました。どういう人間であるか。いかに大変な人であったかというのがこの頃になってやつとわかって参りました。私が言うのもなんですが、非常に頭脳明晰な人物であったと思えます。私もいろいろ世界でいろんな人と会って参りましたが、それに比べてもひげをとらない頭脳の明晰さを持つた人だと思えます。それは勿論父が書いた本を読んでいただければわかりますが、親父のいろいろ残した演説とか書いたものをこの「市長生活十九年」という本にまとめられておりますけれど、それを読んでいただいても本当によくわかると思えます。これほど無駄な文章一つなく物事を書ける人という人は世の中それほどいないだろうと私は思っています。それに非常に理想が高い。普通の理想で満足する人でなくて非常に理想の高い人でした。

それから政治家としては信じられないことですが、私利私欲が全くなかった人だと思っています。

一〇〇%、市のために全身全霊を打ち込んでしまったという人でした。それから自分に対して非常に謙虚であったと。しかも若かったですから行動力は非常にあった。そういう人がですね。全力を尽して越谷の未来を考え越谷をつくっていったということなんです。まず世の中ありえないことが起こったと思います。そういう意味でこういうことを言うと言い過ぎかもしれませんが、越谷にとって一つの奇跡だったんだろうと。大塚伴鹿は奇跡であったというふうにいえると思います。少し大袈裟ですけど私はそのくらいの人物であったと思います。

みなさんはその後いろいろと父の業績というものをご存知であると思いますが、町長になりましたから十か町村ですね、この周りの町村を集めまして新しい町をつくったわけです。四万人ぐらいの人口でした。それを市にまとめて越谷市ができたんです。市してから父が時代の先を読みながら都市計画を実施していったわけですね。私が小学校の時ですけど、初めて水道が越谷にも入りましたし、その後、北越谷に日比谷線が直通で入ってくるようになってからは、越谷の都市化が激しくなってきたわけで、それに従いました。父は率先して区画整理というものを行いました。これは埼玉県でも最初だったと思います。区画整理を北越谷でやりまして、東越谷、南越谷というふうを広げて行きました。区画整理をして街並みを整理と同時に当時は全くなかった下

水道の整備もはじめました。いわゆる都市のインフラ整備ですけど、これは徹底的に行ったということとです。そういううちに今度は武蔵野線が越谷を通過すると。これも最初は草加の方に回るような話だったんですけど、父ががんばりまして越谷に持ってきたと。しかも駅も旧国道の方へできるのを何とか東武線と乗換えができるようなところに



大塚善人氏

駅をつくったということとです。その他、ゴミ、し尿処理はこれは非常に重要な事業ですけど、これも近隣の5町村ですか一緒に処理事業を行ったという事です。越谷インフラストラクチャーというのは大塚伴鹿によって整備されたと言って過言ではないと思います。その後、父は30年計画というものを作りまして、計画が好きだったんですね、う

ちの親父は。若い時社会主義にかなり影響を受けていましたので。計画経済というものをかなり重視していたようでその30年計画を立てまして、それに沿って今の越谷は発展して来たということが言えると思います。

私の父はもともと学者ですので、いわゆる政治家とは言えないのかも知れません。しかしながら父が政治を行うに当たりまして常に考えていたことと、いうものがおそらくあると思います。まず、父は中国哲学ですけど、勿論世界の哲学をかなり消化しておりますので、彼の頭の中にあっただのはギリシヤの哲人精神、ソクラテスやアリストテレスの時代の哲人政治というものにおそらく想像していたのではと思います。また中国の諸子百家についても当然そうでありますし、その後、田園都市論というものを掲げまして都市の自立性というものについて非常に関心を持っております。この都市の自立性というのはいわゆる今のよう政府の補助金をたよりにしてですね、政治をやって行くというのではなくて、越谷は越谷で自分で経済力を持って独立した自治体としてやって行きたいというのが父の夢であった。それがいわゆる田園都市論でございます。田舎にある都市という意味ではなくて、田園と都市というものが融合されたような、そういう都市を父は考えていたようでございます。そのために越谷に工業団地を作ろうと思ったのです。越谷の弥十郎という所に大規模な工業団地を作ろうと。工業団地を作ったところから上がる税金で越谷市の自立性と



いうものを保ちたいというふう考えたのですが、これは大失敗しまして。大塚伴鹿の業績の中で唯一最大の失敗がこの工業団地計画です。工業団地は造成したけれど企業が全く集まらなかったという状況になりました。これで恐らく普通でしたら辞めていたのかも知れませんが、責任を取って。彼はそういう人でしたから。しかしその土地がたま

たま偶然、本当に幸運だったのでですけど小田急が買ってくれるということになって。市が買った何倍かの金額で売れたんですね。工業団地は出来なかつたんですけど、市はこの工業団地の用地によって大儲けしたと。それによって越谷の今の市役所がタダで建ったと親父は喜んでいました。「いや、俺は首になるところだったけれど、うまく売れてしかも市役所まで建てられたと」言って喜んでおりましたけれど。これは失敗は失敗でこれによって残念ながら越谷市というものが自立した都市というのにはなれなかつた。まあ、今考えれば当たり前ですけれど。そんなことは不可能な夢だったんですね。自立した地方都市というものは今も日本の中でもおそらく東京だけですけれどね。大阪だって名古屋だって他もかなり危ないですから。そういう中で越谷が自立をするというのは大変難しい作業だったと思います。まあこの一点を除けば越谷は他の近隣の都市に比べたら大変な進歩をした都市になったんだらうと思います。いい町になりました。僕が子供の時に生まれ育った越谷町、宿場町ですね。宿場の商店街と近隣の農家とそれしかない町でしたから。

それがここまで東京の近郊都市として大変な発展を遂げたということ。これは市にとって見ればある意味で予想外の喜びだったろうと思いますけれど。ここまで大きくなるとは思ってなかったと思います。人口20万ぐらいを想定していたと思いますから、30万を超える都市になるとは思ってなかったと思います。

退職後に父は振り返ってこの本の中でいろいろ書いてありますが、自分は田園都市論を掲げて越谷を自立した中核都市にしたいと思ったけれど残念ながらそれができなかった。完全な東京のベッタウン化しなかつたけれど、やはりそれに近いような状況になってしまった。越谷独自の文化・政治というものを行うまでにはいかなかったんだと残念がっておりました。しかしながら一方で日本の都道府県制度は完全に遅れをとっていると、時代錯誤になっている。今はもうこれを改革して今よく言われている道州制を取り入れなければと晩年書いております。道州制の中で、その中の越谷というものをこれから考えなければならぬ。私もいま南越谷コミュニティセンターで仕事をしておりますけれど、南越谷はもう東京の一部ですね。越谷はまだ越谷ですけど、南越谷はあれは東京ですね。と言うことはもう越谷市というのは東京に飲み込まれてしまうか、東京圏の一都市なんだろうと思います。埼玉県越谷市というふうに考えない方がいいのではと思いますね。東京圏の越谷市と。その中核の都市に越谷はなりつつあると思います。今後はますます

す発展するだろうと思います。片方にさいたま市があります。越谷市の未来もかなり明るいのではないかというふうに思います。それは東京圏の中で越谷というところの位置が東京の北にあるわけですが、東京の北部が今後開発されるであろうというような期待を持っております。特にスカイツリーというのをつくっておりますが、その経済効果は大変なものだと思います。恐らくあの周辺の人口は増えると思います。企業活動も活発になると思います。ホテルも沢山できると思います。そこが越谷から直通で30分のところにあるわけですから、越谷というのは今後ますます発展することが考えられると思います。今後を考えると越谷がそれを先取りして新しい街づくりをする時なのではないかと思うんですね。どなたかいらっしゃいませんか。次の大塚伴鹿がそろそろ出てもいい時期かなー、というふうに思います。新しい合併の時なんだと思います。越谷だと規模が小さ過ぎる、春日部・草加それらの近隣都市を全部まとめて新しい都市を、百万都市をつくるべき時代なんじゃないかと思えます。今日聞いてくださっている皆さんが無理でしたらご息でも孫でもいいですから何とかそういう人を育て上げて新しい越谷をつくって行きたいなーと私は思っています。私も子どもが5人もおりまして、何とかその一人ぐらいはなつて欲しいと思っております。ですが、時代の寵児みたいにならないといけないんです。時代が求める人間にならないといけない。うちの親父はたまたまそういう時に町長になつ

てしまったわけですけど。今もそういう時期に来つつあるわけで、その中でそうなってくれる人が越谷に一人でも出て欲しいなというふうに思っています。皆さん、越谷で非常に楽しくお暮しだと思います。僕もこの町が非常に好きですし、非常に庶民的で気取らない町ですので、ますますよくなって欲しいと思うんですけど、皆様の中から皆様のお子さんお孫さんの中からもう一度この越谷を大きくしようじゃないかという人が出て欲しいなと思っております。これを最後に皆さまへのご希望として述べさせていただきます、私の話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

——どうもありがとうございました。今の話は序論でございます、あと皆さんも大塚伴鹿さんをご存知のお方が多いと思います。大塚さんのお話をどなたかしていただく方はおいででございますでしょうか。是非大塚伴鹿さんの時代にこういう話がありましたと、ご子息である善人さんにお伝えしていただくということもまた面白いのではないかと思えますので、どなたか大塚伴鹿さんの思い出をお話いただければありがたいとおもいます。

——みなさんこんにちは。私は七左町の八木下と申します。今日は大塚先生のお話を聞けるということに参加しました。大塚さんのお母さんは学校の先生でしたよね。私は出羽中学校の時、お母さんに授業を教わった者です。よくお父さんの話が授業の間に

出まして、家に帰ったら選挙の時はお父さんの名前を書いてくださいと、強制しませんからと。一つ、いまだに記憶に残っているのは、うちのお父さんは右でもない左でもない市民の代表として皆さんの力になりますと。昼休みの時間にお母さんから聞いた



大勢の方が熱心に聞いておられた

たので、あーこの人は右でもない、左でもない町のためにやるって言うことで。3万都市をつくる時もよく授業の時に、それから時々学校の授業の合間にお父さんが見えまして、その時にも聞かされました。その辺でお母さんのことも聞きたいなーと思いま

して、一つよろしくお願いいたします。

うちの母はですね、5月、先月亡くなりました。大塚伴鹿は彼女に支えられていたんだと思います。大塚家は越谷の町長に就いた時もこの町に30坪の土地しかなくて、大塚家は全くお金も無かったのですけれど、それを支えたのは母の大塚幸子ですね。大塚伴鹿はお金のこととは全然かまわず本を買って酒を飲んで暮らしている人間でしたから。市長の給料だけでは足りなかったと思いますし、それをずーつと支えて来たのは大塚幸子でした。ただ私、学校で選挙運動をやっていたのは知りませんでした。まー間接的な選挙運動がうまかったなと。

——ありがとうございます。それではちよつと大塚伴鹿さんのお酒の話ができましたので、お酒のお話をどなたかしていただける方はございませんか。

——こんにちは、浅井です。先ほどの話の中で市長生活十九年の中で武蔵野線の話もありますね。それと県の鳥の確か野田の白鷺があるところをシラコバトに変えてくれたのも伴鹿先生でした。東越谷の区画整理事業で駅からまっすぐの道路ができて、何人かの人はご存知かと思いますが、東越谷の昔は東小林といっていましたけれど、あそこに橋が架かって区画整理事業になると確か土地が数百倍から千倍になることをよく知っていましたよね、伴鹿さんは。しかしながら家族、親戚、友達に一切そういうこと

を話さなかった。私利私欲が無かったということ、本当にすごい市長だと思っております。それと先ほど選挙の話が出ましたけれど、確か市民党という言葉を通じて使ったのが伴鹿先生でした。政治とそれを通じて街づくり、越谷の文化をこよなく大事にしてくれた初代市長で名誉市民でもあります。市民葬も行われました。伴鹿先生の中国哲学思想といったこともありますが、私利私欲なしであれだけ情熱的に完全燃焼できたのかというところを一番近くにいたご長男の善人さんからお聞きしたいなと思います。

先ほどこちよつと触れましたけれど、非常に真面目な人だったんですよ。仕事の点において手を抜くとか息を抜くとか、そういうことは全く無かった人なんです。今の私から考えるとよくあのように生きられるなど、どうやったらあのように生きられるのかなーと思いますけれど、その反対に、といいますかお酒を飲みだすともう完全に酔うまで飲まないとお目でした。それから毎日張り詰めた神経を弛緩（しはん）させるといふか緩めるといふかそれが酒と。ですから真面目さと酒との二つだけでその間がないのです。普通その間に趣味とかがあるのですが、父は趣味というのが無いのです。学問が趣味、ですから市長をやっていたときは学問が趣味でした。市長をしながら毎月新しい本が出ると取り寄せたり、いつも古本の雑誌は送られて来たり、古本を買ったり、本を集めることをしてましたし、それ

が趣味だったのです。いわゆる遊びというのは余りないので。どうしてああいう人になつてしまったのかというのは、やはり僕は両親を早く亡くしたせいだろうと思っております。父が九歳、大正十三年の時に父善太郎が、その前に母が亡くなつてま

すから。私の祖父祖母は父が九歳の時に二人とも亡くなつてしまった。孤独の身になつたわけですね。兄弟は一人いましたけれども。それから親がなく成長したわけで、その中のコンプレックスみたいなのがあつたと思いますし、そのコンプレックスが力となつてあういう生活態度を取らせたのかなというふうに思います。普通だったらもう少し欲が出てもいいと思うのです。市長の頃に一町歩ぐらいどこかに買っておいでくれたら、僕ももっと楽ができたのですけれど。一坪も買ってないんですよ。父はよく「市議員というのはね、三分の二は不動産屋だけ。みんなこの土地が上がって、どこを買うとか、そういうことしかやらないんだから、ひでーもんだ」と言つてましたけれど。まーそういうことを全然しなかったというのは不思議な人ですよ。ついしちやいますよ。だつてもう判つてい

か。伴鹿先生の逸話などご存知の方がおられました。是非お話を聞きしたいと思つてます。だいぶ善人さんのお話と皆さん方のお話で伴鹿先生の人間像がわかつてきたような気がします。

伴鹿先生のお酒のお話をもうちよつとしていただければありがたいのですが…。

親父の酒を飲むというのは宴会がたくさんあり、出て帰つてきますけれど、別に好きで出ていたのではないと思つてます。一番親父の好きな飲み方は酒屋で座つて一杯ですね。佐野屋、秋元、幸手屋その辺の店先で座つて飲むのが親父が一番好きだつたと思つてます。やはり何と申うか、その辺の人と普通にしゃべるのが好きで、いわゆる宴会などで偉い人が集まるところで酒を飲むよりは店先でコップ酒で焼酎、酒を飲むのが一番気が休まったんだろうと思つてます。政治のことを考えなくていいですからね。僕が子どもの頃はよく「迎えに行つて来て」といわれて迎えに行くわけですよ。飲んでいる所が判つているわけですから。そこで親父が煎餅などをかじりながら酒を飲んでいくわけですよ。僕が行くと酒屋の人がサイダーなんか出してきて。それがうれしくて、迎えに行つてくれと言われるとうれしくて迎えに行つたもんです。あとは色気とかは無かつた人ですからね。飲んで問題を起こしたつていうのは一度もないですよ。これも僕なんかにはすれはつまらないなーと思つてましたけれど。どこの芸者と出来たとか、そういう話は全く無かつたですね。本

——ありがとうございます。他に何かお話はございますか。折角の機会ですのでいかがでございます

当に市だけなんです。市政だけ。そこで市長を終えたら元の学者に戻ろうと思つてまた毎日勉強してですね、本を二冊書いて死んでいきましたけれども。どうして真面目一方で生きられるのかなーって。遊びというか、いい加減なところというか、そのようなどころが全く無い人で、子どもから見てもそういう意味で遊んでもらつた記憶はほとんどないですね。ある意味で変人だつたんでしょね。変人じゃなければ出来ないですよ。

——大塚先生、貴田でございます。実は私の家は大塚家とは祖父の時代からのお付き合いがあります。そしてうちの祖母は「ばんちゃん、ばんちゃん」といつて青年時代の大家伴鹿氏を呼んできた思い出があるそうです。それで私どもが一番感じるものは大家伴鹿氏は社会党で最初は出馬されました。黒い背広で非常に地味な演説でしたけれど、人に十分聞かせる演説でした。そしてそれが市民党になっていかれるその過程の中で、幅広い支持を得て行った。そして私たち青年時代には越谷市青年団の一員として私たちはどんなにか大家伴鹿市長に励まされ続けたか、ということを感じまして。特に成人のお祝いを越谷市の青年団がやったときに一番最初に春日部高等学校の先輩が来てくれて、その次には吉野源三郎氏を呼んだのです。「君たちはどう生きるか」という書物を書いた人ですが、そのとき大家伴鹿氏は大喜びで「よく呼べたな」という感じでございました。私達一番燃えた時代を大家伴鹿氏がつ

くつてくれたという思い入れが非常に深くございます。善人さんのお話を聞きながら更に燃え続けた越谷市の時代をおつくりくださったことに感謝しております。それと何といつても乱開発を止めてくれた。越谷市の条例をつくつて乱開発から食い止めてくれたというのは、これは矢張り歴史的にすごいことだつたと思つております。どうもありがとうございます。

最後に実は今日の話、私は少し伴鹿、伴鹿と言ひ過ぎまして何か伴鹿が一人でやつたように思われるかがつて越谷も当時は燃えていたんだと思ひますね。越谷の市役所の人たちも市会議員の人たちも親父はそれを引つ張つてやつていったということだろうと思ひます。今の越谷を見てみますと、それに比べると皆さんゆったりと暮らしているなど、これでもいいのかなという気持ちもありますけれど、あの頃はきつと皆さん若かつたんだらうと思ひます。私もその頃一緒にやつた見たかつたなという気がします。きょうは本当にありがとうございます。

——大塚善人さんには心温まるお話、伴鹿さんの生きられた時代をしのぶお話をちょうだいすることができました。

次は大野伊右衛門さんのお話ということで、大野光政さんにお話をいただきたいと思ひます。ただ、ちよつと大塚先生とハンドがありますのは、お孫さん

の時代でございます。おじいちゃんとお孫さんという関係でいろいろなお話をいただければと思ひます。大野伊右衛門さんの家と申しますと、越谷にお住まいの方には付け加えるまでもありませんが、私どもにとつては郷土研究会の初代会長で、それから材木屋さんとして長い歴史をお持ちの家柄でございます。そういうことを含めてお話をしたいだければと思ひます。よろしくお願ひいたします。

私はご紹介いただきました大野です。大塚さんよりは七歳年上でございまして、ちよつと七十歳ですね。先ほど質問された八木下さんとは同級生です。大塚さんはよく新見世に酒を飲みに来ましてね、その帰りに寄るんですよ、うちへ。隣の隣ですからね。「おい、いるかい。一杯飲もうよ」なんて、よくわたし、声を聞きました。本当にお酒が好きで足許よろよるとよく見たりしました。愉快な太っ腹な人だと思ひましたね。

伊右衛門は私にとつては祖父のことなんで、親父のことだつたらもうちよつとしゃべれるのですが、中々しゃべれないと思ひますけれど、それなりにしゃべつてみたいと思ひます。

この郷土研究会会報の創刊号は一九七二年発行ですが、私の祖父は九十二歳で亡くなりましたから、八十六歳の時ですね、創刊号ができました。この創刊号を見ますと皆さんお持ちの方もおられると思ひますが、その時に理事になつていた方が大家伴鹿さんです。それから幹事に谷岡さんなどがいらつしや



います。うちの祖父は亡くなる八年前のことですけれど、大変皆さんにお世話になっていてその点では感謝いたしたいと思っています。この本が出る前、「越谷町秘話」という本が出たのをご存知ですか。創刊号が出る十五年前に出た本なんです。ここにも大塚伴鹿さんの序文があります。「越谷町秘話」というのを誰が書いたかというところ、埼玉日報の八島さ



大野光政氏

んですが、この方は私と、たまたま血のつながりがあるんですよ。この表紙の絵には「春水」と書いてあるのですが、この方がもう一人の私の祖父なんです。日展で特選を二回とりまして、旧帝展の審査委員などやっていました。たぶん大塚さんの家にもあると思うんです。短冊の一つぐらい差し上げたと思うんですよ。非常に活躍した人なんです。名鑑には百万円と載っているものもあるんです。これも

「ばーつて、いくときはいつちやうみたいですね。うちの祖父が生まれたのは明治十九年ですね。今生きていれば百二十四歳です。三十二年前に他界して九十二歳でしたが、この明治十九年という年は日本ビルとかサツポロビルが出来た時ですね。帝国大学が創立された年です。日銀はちなみに四年前に設立されました。明治十九年というのは翌年に東京に初めて電燈がついたんですよ。横浜とか銀座にはガス燈がありましたけれど、生まれた時はガス燈などあるわけないですから行灯ですよ。行灯やろうそくの時代に生まれたということです。この年には小学校令とか中学校令などが公布されました。ベンツがこの時代に自動車を開発したといわれています。この時の総理大臣が伊藤博文です。生まれた三年後に憲法が出来たんですね。大日本帝国憲法、それから皇室典範も発布されたんです。だから古い話ですよ。そして明治三十七年に春日部中学校では第二回卒業生です。三十九年に二十歳の時に早稲田大学予科修了になりました。たぶん早稲田大学になってから四回目の卒業生だったそうです。それから二十七歳の時に、大正二年ですね、出羽村の収入役になった。三十四歳のときに出羽村の村会議員になってます。越谷に消防の連合会という組織があったんです。今は市の管轄ですけど、昔は越谷警察署管内だったんです。それは大正十四年に出来ました。その時の会長になったんです。そういうのは消防の歴史には載ってませんね。そういう記録というものは残っていません。それから三

十六歳のときに、出羽村の村長になったんですが、その時に関東大震災にあい大変だったかと思えます。その後、四十一歳で県会議員になりました。二期八年やって辞めました。その後、大日本消防協会代議員をやってました。昭和十五年、私が生まれた年にいろいろ政治に顔をつっ込んでいたんですが、なぜか公職をすべて解消されるんです。それは畜産組合法違反で懲役六ヶ月、万事休すですね。執行猶予二年が過ぎましたけれど、その時は五十四歳でした。それから四十年近く長生きしましたけれど、政治なんかに関わらないと思ったのではないですか。それから神社関係の方に力を入れたんです。その後いろいろ活躍するのです。私の家にいろいろな方が泊まっているんですよ。立派な方がいらつしやって、おじいちゃんもそれを見て自分もあのようになりたいと思ったこともあったのではないかと想像するんです。その泊まった方の記録は越谷市の公的資料には全くありません。私の家の記録に残っているわけです。一人は徳川慶喜です。この写真が十五代將軍の頃の写真です。慶喜が晩年の頃、祖父が十四歳の時に来ているんですね。明治三十三年六月五日、西暦で言うとい九〇〇年です。ちょうど百十年前です。慶喜が六十三歳のときです。この時の首相は山県有朋でした。二晩泊まったという記録が残されています。祖父が十四歳です。それから結構多感の年だったと思うんです。慶喜が来て多分刺激を受けたのではないかとも思うんです。この時、何のために越谷に来たかという、実



はこの前の年は芋金火事にあっているんですがそれとは関係なく、宮内省の江戸川筋の御猟場に鶴の鷹狩りに来たのですね。この時、来られた付き添いの人達は宮内省関係では主猟局長一名、主猟官三名、会計官二名、徳川の家臣二名でした。私の家は旅館でありませんので全員が泊りませんから、慶喜公とその家臣二名の方たちは六月五日の夜と八日の夜の二晩泊まっています。その他の方は旧本陣といえますから大沢の大松屋・福井家に泊まったようです。うちから近いですからね。その時、家の中で働いていた下男下女、今は差別用語となっていますが、その頃は当たり前の言葉ですが、その人達に心付けとして、番頭も含めて合計五円いただいたと記録されています。その他にはお茶料十五円いただいたていますね。それと慶喜公が書いたとされる自筆の俳句が残されているんですね。「毛呂山の 人に問わばや 昔より 絶えて花なき 春の心」と読んで、最後に慶喜とサインしているんですね。越谷地方を読んだものではないので、ちょっと変だと思わずにください。鑑定に出さない方がいいかもしれませんね。出してがっかりするよりか。

日露戦争では旅団長や元帥とか参謀総長なども歴任しています。このような大変な人が泊まっているんです。それから朝鮮の殿下が大正六年に、大正八年、朝香宮鳩彦（あさかのみや・やすひこ）殿下がお泊りになっています。この時はうちの祖父は三十歳でしたら多分お話をされたのではないかと思っております。昭和になって十九年にその時は伊右衛門が五十八歳の時ですけど、賀陽宮邦寿（かやのみや・くにとし）殿下が泊まられています。この頃の伊右衛門は政治方面から身を引き、社社の方面へ行くそうかと考え、社社の方へ行っただと思えます。神社は日本には現在約八万社あります。各神社には総代がいるわけです。「神社役員総代必携」という本があるのですが、この中に「全国神社総代会のあらまし」というのがありまして、実はうちの祖父が六十三歳の時に全国の総代会をつくらうとした「言い出しっぺ」なのです。そのことがここに載っているのが皆さん回覧しますのでご覧になってください。政治をやめて神様に奉仕しようとしていたんですね。

できますか。

私の話はあちこち飛んで申し訳ございませんけれど、「江戸百景今昔」という本を出しているのですが、この間第三刷りをしました。中を結構変えました。この本を郷土研究会へ一部贈呈しますので、どうぞ後でゆっくりご覧になってください。そして、よろしかったら本屋で買ってください。そういうことでございます。ご静聴ありがとうございます。

——— どうも貴重なお話をありがとうございました。それではただいまの貴重なガラス板の写真をお持ちでございますので、全部とはいかないかも知れませんが拝見させていただければと思います。

〈明治時代のガラス板写真真映写〉

——— 大野さん、どうも貴重な写真を見せていただきありがとうございます。大野伊右衛門さんご本人も写真の趣味があったということのようです。では、大野さんに対しまして何かご質問とか伊右衛門をよく知っているよ、というお話がございましたら、お話をいただければと思います。

——— 大野さんのご商売はなんだったんでしょうか。お話聞えればと思います。

——— 商売はですね、昔は材木で川のところに河岸を作っ

て船で瓦曾根まで行きまして、そこから積み替えて江戸まで行くとかしてました。でも戦後、農地解放で没落しました。

——いつごろまで材木屋をしていたのですか。

うちの祖父がやってみましたから、まあ戦前ですかね。たぶん五十四歳の時に執行猶予になっていきますからその頃までではないかと思えます。

——谷岡さん、何か一言お願いできますか。

——今ご紹介いただきました元この会の会長の谷岡でございます。大野伊右衛門さんとは先ほど紹介されました会報の創刊号も私も関わったのですが、この会のために非常に尽力されました初代会長の伊右衛門先生には頭があらぬという気としておるわけでございます。エピソードとしましては、非常に気さくな伊右衛門さんでございましたけれど、なかなか外部にはお話なさらないことがたくさんございまして。会では私が聞き役で少し伊右衛門さんも世間話とかいたいたことがございます。一つだけエピソードとしまして、ちょうど私の家に不幸がありまして、葬儀を出したことがあります。その時にいきなり何も通知していないのに私のところに来ていただいて葬儀委員長を自ら引き受けられたということでございます。その他いろいろありますけれど、一つだけこの場を借りて披露した

次第です。ありがとうございます。

——浅井さん、何かございますか。

——ありがとうございます。大野さん、きょうは埋もれたお話を数点聞くことができたのですが、個人



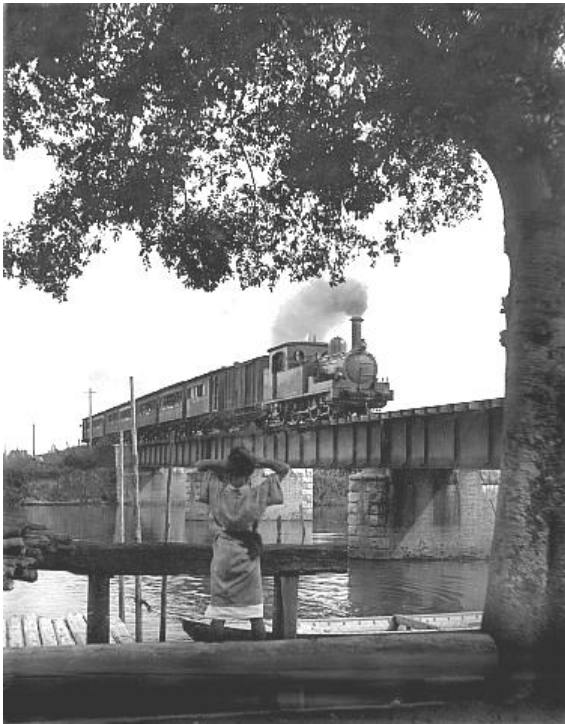
あいさつをされる大塚善人氏（手前）と大野光政氏（奥）

所有のお宝など越谷市の歴史に係るようなものの今後の活用の仕方とかどのように感じておられるかよろしかったらお話願えますか。お考えがございましたら是非お聞かせいただければと思います。

越谷に展示するものがないんだといわれますが、今までいろいろな方が考えてくれましたけれど、やろうと思っても本当に必要なんだろうかとか、お金がかかるのではないか。何かアワのように消えてはと、そんな話はたくさんありました。できれば本当は必要ですよ。でもそんなものつくって何になるんだという人もいますけれど。でも何とか議会の方でもがんばっていただいて、そういう方向付けはしていただきたいな—と書いています。皆さん望んでいると思うのですよね。是非お願いします。

——いま大野さんから話がありました展示物ですが、越谷には展示をするところがないんですよ。越谷でも大野さんのものというのは鑑定団の中でも私も聞いていますが、いろいろ話がでるんです。だがしかしこの地元としてはそれ程、関心度が低いというので鑑定団などのテレビ局も来ないそうです。これから越谷にもいろいろものがたくさんあると思いますので、大野さんを推進人として一度鑑定団を呼べるような、また展示場所を市の先生方をはじめ市民にも協力していただいて、そういうものが出来る—と書いておりますが、いかがなものでしょう。

——それでは皆さん、長時間いろいろとありがとうございました。進行につままして皆さん方のお話を聞いていただくということで盛り上がりました。お



元荒川の鉄橋を渡る蒸気機関車を少年が見つめる

二人にもう一度お礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。皆さんのご協力によりまして、楽しい越谷のお話を聞かせていただくことが出来ました。皆さんのご協力をありがとうございました。

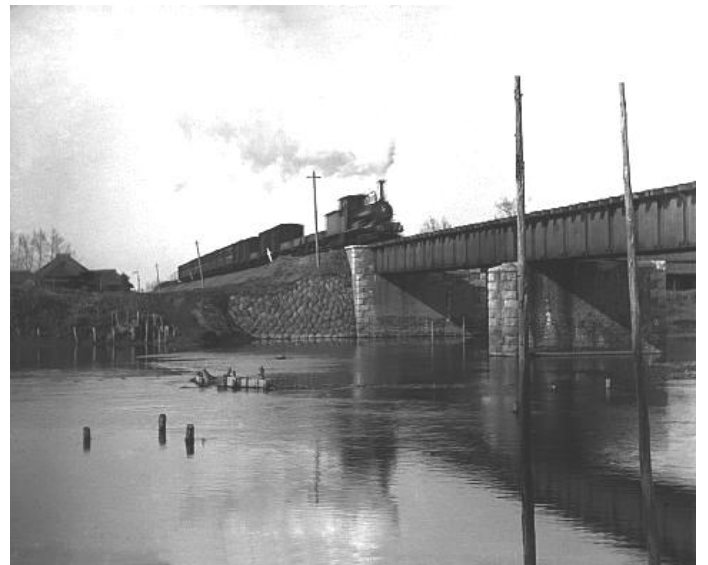
(大野光政氏は当時の歴史的な背景などについても多くの話をされていますが、紙面の都合で、大野伊右衛門氏に関する事に絞らせていただきました。)

明治時代のガラス板写真

大野光政氏 所蔵



元荒川鉄橋付近で蒸気機関車の通過を船上から待つ人々



元荒川鉄橋を渡る東武鉄道の5号蒸気機関車 B1 形



ガス灯の傘の下部に「こしがや」の文字



東武鉄道越ヶ谷駅ホームに入線の蒸気機関車の客車 ガス灯が見える